発表要旨

現代ギリシア語とアルバニア語の前置詞に関する一考察（2）

井浦　伊知郎

本発表は、第6回研究発表会における研究発表「現代ギリシア語とアルバニア語の前置詞に関する一考察」、及び「プロピレア」6号に掲載された論文「現代ギリシア語との対照によるアルバニア語の前置詞 në, mbi, te の機能の研究」に続くものである。

アルバニア語の前置詞 nëは、ギリシア語の σε よりも位置関係において「内部」を示す機能が強い。つまり基準領域内部に対する対象物の包含を強く指向する。一方で nëは壁など垂直面にある物体の位置を示すこともあるが、壁の「表面」と同時に「内部」に物体が存在することをも意味し得る。更に nëは、対象物によっては「上面」を示す前置詞 mbi と置き換え可能である。

また、現代ギリシア語 κάτω από に相当するアルバニア語の前置詞 nën を用いた「下方」表現では、対象物と基準面との接触の有無は区別されないが、これに前置詞 nëへの置き換えを行なった場合、基準面への接触の有無によって意味が大きく変化する。例えば、「蠅が天井にとまっている」というアルバニア語の文の前置詞 nën を nëに置き換えると、「蠅が天井裏にいる」という意味になり、同じく nën を用いた文「ランプが天井から下がっている」で同様の置き換えを行なった場合には、「ランプが天井板に埋まり込んでいる」等と解釈せざるを得なくなり、不自然な表現になる。前者の例の場合「蠅」は「天井」に接しており、後者の場合「ランプ」は「天井」に接していない。この相違が、明らかに意味の変化に関連している。

これらの現象は、アルバニア語で「下方」を示す表現が「上方」「内部」のそれに比べて単純であり、「上方」「内部」の表現では厳密な位置関係の区別が前置詞 nën による「下方」の表現にはないことを示している。またこうした表現形式が前置詞 nëとの置き換えによって崩れるという現象は、nën による「下方」の表現では意識されない対象物と基準面の接触の有無が、前置詞 nëへの置き換えによってはっきり現れた結果であり、アルバニア語の në を用いた表現における「内部」指向性をも改めて示している。